

もうガマン  
できない

モモンガ 桃の助

## 目覚め

---

Aは朝起きるといつもの様に不思議な光に包まれている  
1ヶ月前に始まったこの現象にようやく慣れてきた

一人暮らしの部屋の壁には女性アイドルのポスターが所狭しと貼られている  
Aがテレビを付けると最近話題になっているニュースが流れてきた

『調布で女性バラバラ遺体、バラバラ殺人三ヶ月で8件目、連続事件か?』

ニュースキャスターの男性は事件が続けて起こったことを  
待ちましたといわんばかりの様子で興奮して伝えていた

ニュースコーナーが終わり、女性アイドルグループTKBのM田の妊娠騒動が  
伝え始められるとAのまわりを包んでいた光はすでに消えていた

夜Aは秋葉原に来ていた  
目当てはTKBのM田のグッズを買うことと例の妊娠騒動を仲間に確認することだ

Aが18歳になり3年前、北海道から東京に出てきた理由も  
TKBの活動が秋葉原を中心にしているからだ

AはTKBカフェで仲間にM田について聞くものの  
[M田は誰とでもヤル] だとか  
[M田をはらませたのは俺だ] とか  
ファンとしては聞き捨てならないことばかりを言うやつばかりで  
詳しい情報は得られなかった

その後駅から離れた場所にある洋食屋でステーキ定食を食べた  
このステーキはとても分厚い  
しかしナイフに力を入れなくても簡単に切れるほど柔らかい  
ここでステーキを食べるとほかの店で食べれなくなるほど美味しい

美味しい肉を食べてAは満足して店を出た

駅へ向かいひと気の無い道を歩いていた  
その時だった！

『きゃ—————！』

暗い通りの横にある公園から女性の悲鳴が聞こえてきた  
反射的にAはその方向を見た

公園の街頭の下には腰を抜かした感じになっている女性がいた

駆け寄ると女性は泣き、怯えた表情をしていた  
横にはなんとバラバラになった遺体がある

Aは状況がつかめなかった

怯えた女性はまだ悲鳴をあげていた

女性をなだめようとして近づき、顔を見た

な、な、な、なんとTKBのM田だった！

Aはさらに混乱した

なぜM田がここに？

なぜ怯えている？

横の遺体は？

M田の顔を見る M田は怯えた表情で何かを見ている

AはM田の視線の先を確かめる

そ

こ

に

は

赤い身体をした何かがいた

頭には二本のツノがあり、  
眼は釣り上がり、  
巨大な口をしている  
バラバラにされた人の腕を喰べようといった

Aはそれを鬼だと思った

Aは腰を抜かした  
このままじゃ自分も喰べられると思った

横にはM田がいる  
守る余裕もない  
悔しいが自分だけでも助かりたいと思った

鬼が腕を喰べ終り二人に近づいてくる  
ゆっくりとした重い足踏みで

Aは死を覚悟した

死ぬ前にM田の顔をじっくり見たいと思った  
M田の顔は泣き崩れても可愛かった

M田の下半身を見た  
スカートがめくれパンツが少し見えていた

Aは興奮する  
鬼はすぐそこまで来ている

AはM田の顔を見る  
パンツを見る

Aの興奮は止まらない  
その時、Aの下半身から光が輝き始め、光は大きくなる

鬼は光にたじろいだ

Aは立ち上がる  
M田を見る  
M田も眩しいようだ  
その顔がかわいい

Aの光はますます大きくなる

Aの興奮と比例して光は大きくなる  
鬼は目を光から守るように手で塞ぎゆっくりとあとずさんだ

AはM田の方を見る

M田

『助けて』

M田の潤んだ表情がAの光をさらに拡大させた  
光は半径1メートルほどの球体になった

M田

『お願い』

Aの意識は飛ぶ寸前になった  
球体は小刻みに振動し、光は一点に凝縮され、鬼に目掛けて飛んでいった

光は鬼の胸を貫き、肉体すべてを消滅させた

それと同時にAの意識も無くなった

## 第2の目覚め

---

Aは気づくと病院のベッドの上にいる  
意識を失ったあと運ばれてきたらしい

目を覚ますとすぐに二人組みの男が駆け寄ってきた  
男らは刑事のようで前日の夜起こったことを聞いてきた

Aは女性の悲鳴を聞き、公園に立ち寄り  
バラバラになった遺体を見て失神したと嘘をついた  
刑事らは一通り事情を聞き、となりのベッドに行った

となりのベッドにはM田がいた

M田も悲鳴をあげAが駆けつけたところで失神したと嘘をついているようだった  
刑事らは釈然としない表情しながらも病室を出て行った

M田はAにお礼を言った

『助けてくれてありがとう、あの化物はなんだったんだろ？』

A

『鬼みたいだったね』

M田

『本当に怖かった、私は助かったけどマネージャーが...』

A

『.....』

昨夜のM田の横の遺体はM田のマネージャーだったようだ

しかし、Aは不謹慎ながらあることに気づいてしまった

M田とふたりきりであるということを

Aはこのような状況にも関わらず興奮し  
光はそれに呼応し大きくなり始めた

M田はマネージャーを思い出してなのか泣き始めた

AはM田を慰めなければ顔を見た

ヤバイ、かわいい

Aの光はますます大きくなり、とどまることを知らない

Aは意識を何とか保とうとする

しかし、またしても気づいてしまった

M田がノーブラだということを

Aの眼は見開き、鼻腔も広がり、光は小刻みに揺れ始めた

光の半径は、昨日の1.5倍はありそうだ このままじゃまずいと思いAは  
話しを変えようとした

『妊娠したって話本当なの？』

M田は黙って頷く

A

『本当なんだ... 相手は？』

M田

『.....』



なかなか答えてくれない

M田

『誰だかわかんないの』

AはM田の相手がわからないこと  
アイドルなのにテレビの裏では派手に遊んでいたことに胸が苦しんだ

M田は潤んだ眼でAを見ている

Aは悲しい気持ちとは裏腹に  
この女ただのスケベエではないのか？  
という気持ちも生まれた

Aは想像した夜な夜な遊びふける M田の姿を！

光の震えはさらに激しくなった

M田の胸が見たい

Aはもう我慢できなかった

Aの視線がM田の胸にいくと同時に

光は収縮し、M田を貫いた！

M田は消滅してしまった！！

Aは思わず叫んでしまった

『え—————』

Aは光を放出した脱力感とM田を消したショックで意識が薄れていく  
だがこのままここにいれば、刑事にM田がないことを聞かれても上手く説明できない

あとあと疑われることは間違いないと思い

Aは病院をこっそり抜け出した

### 第3の目覚め

---

Aは自宅のベッドで目覚めた

病院から抜け出し自宅に帰り

すぐに倒れるように寝た

鬼がいたこと昨日起こったことなど気持ちを整理しようとお湯を沸かしコーヒーを飲んだ

テレビをつけると例のアナウンサーが興奮しながらAがいた病院前からレポートをしていた

『おととい秋葉原の公園でバラバラ事件が発生し  
その場にTKBのM田さんがいたという事がわかりました！  
しかし、そのM田さんが突如、入院先のこの病院からいなくなったとのことです！』

そのアナウンサーは、自分を取り扱っている事件が大きくなり  
眼がイキイキしていた

AはM田を消してしまったことをすごく悔やんだ

3年前Aは田舎の北海道にいた  
Aは自分を表現するのが苦手だ  
高校を卒業して大学に行ける学力もなかった  
働こうにも面接するたびに自己PRや志望動機もうまく言えない自分がいた  
Aは自己嫌悪に陥った

そんな時TKBのM田を初めてインターネットのGuutubeで見た  
M田はアイドルグループのリーダーながらも自分を表現するのが苦手だ  
それでも、彼女はひたむきながらも一生懸命歌を歌い  
ファンへの感謝への気持ちを自分の言葉で伝えていた

一生懸命にしている姿を見てAは胸を打たれた

AはMを応援したい、また自分を変えたいと思い東京へ出てきた  
M田を応援するため秋葉原のTKB劇場へ足を運んだ

M田が一生懸命歌っている姿は美しかった

自分と似ているM田の頑張っている姿を見て励みにしつつも  
Aは働くこともしなかった

Aは親に仕送りをもらい3年過ごした

AがしていることといえばM田を想い  
性欲を自分一人で吐き出すことだけだった

そんな日が何日も続き、Aは死にたいと思ってきた  
Aは部屋で首を吊ろうと思い、柱にロープをかけた  
ロープに首をかけようとした時、壁のポスターのM田と目が合った  
これから死のうと思っていたAだがなぜだかAは勃起した  
そのとき、股間から光が出ていることに気づいた

Aは光を不思議に思い、またポスターのM田の笑顔に癒され  
死ぬことをやめた

AはM田を消した不思議な光について考えることにした

光は興奮するとつまり勃起すると大きくなり  
限界が来る（射精状態になる）と発射されるのだと思った

Aはショックだった

大好きなM田がいなくなった理由のすべてが  
自分にある事を悔やんだ

さらに次に流れたニュースがAの心を動揺させた

『渋谷で大量バラバラ殺人事件  
被害者は5人とみられています！  
ここ3ヶ月でバラバラ事件は10件目被害者は合わせて14人にもなっています』

Aは自分が倒した鬼以外にも何かがいると反射的に察した

しかも、その何かは5人も殺す凶悪な生き物だということを

Aはこの何かを倒すことがM田への償いになるのではと考えた

いや償いになるに違いないそう思うことで自分を納得させた

償い

---

Aは家のパソコンでインターネットをしている

何かは昨日渋谷で犯行を行った  
その手がかりが現場にあるかもしれないからだ  
パソコンで場所を調べた

《代々木公園》  
そこで虐殺が行われていた

夜10時に公園を散歩中の住民が遺体を発見したことや  
警察が駆けつけたあと、あたりは多くの野次馬が集まったことがわかった

Aは現場にいけば目撃者がいるかも知れないと思い、渋谷に向かった  
渋谷についてお腹が空いていたので洋食屋に行ってハンバーグ定食を注文した  
この店のハンバーグは国産の良い肉を使っている  
ラグビーボールのような形をしていてボリュームもありナイフを通すと肉汁が溢れてくる  
とてもジューシーでおいしい

店を出て、代々木公園に着いた時、夕方になっていた  
代々木公園は桜の木が多くあり、林のようにになっている部分もあった  
公園の中央付近に歩いて行くと規制線が張られていた  
そこで警察が現場で鑑識を行っていた

その様子を住民やマスコミが眺めていた  
中には公園に住んでいると思われる浮浪者らしき人もいた  
Aは浮浪者たちが仲間内で情報のネットワークが広いのではないかと思い、その中の一人に声をかけた

野球帽をかぶり、あごには長いひげをのばし、黒いダウンジャケットを着ていた

Aは  
『何があったんですか？』  
と声をかけた

浮浪者と思われる人

『さ、殺人事件、バラバラ事件、昨日はも一凄かったよー、あたり一面血の海だよ』

『人も多く集まって大変だったよー』

A

『犯人を見た人はいないんですかー』

浮浪者と思われる人

『さー知ってる限りはおらんなー』

Aは犯人を見た人がいないなら、現場をよく見ようと思いを観察した

人通りの少ない公園、薄暗い場所

秋葉原の公園と共通点もある

そういう場所に何かは出るのだとAは思った

辺りは薄暗くなって来た鑑識は引き上げ、見張りの警察官が何人か残っていた

Aは警察官のスキをみて規制線の中に入れないか考えていた

Aは喫煙所でタバコを吸い、少し待つことにした

公園に来てから頭痛がひどい

頭を触ると少し腫れていた

現場に戻ると警察官の姿は見当たらないAはシメたと思った

人目につかない場所から規制線をくぐって中に入って行った

林の中を進んで行くと、帽子が落ちていた

その先に靴も落ちていた

い

や

靴ではない

落ちているのは

人の足だった

さらに進むといなくなった

警察官の無惨な死体もあった

Aはすぐ近くに何かがいる

そう感じた時、頭に衝撃が走った

Aはその場に倒れ込んだ

後ろを振り返ると鬼が立っていた

前に見た鬼よりも大きい、2メートル近くはある

脳天に強烈な一撃をくらったAは早く逃げないとやられると思った  
前のときのように光は出ない 這いつくばるようにして鬼から離れた

鬼の方を見た

『ヴォーーー』

大きな唸り声をあげている

唸り声を聞き一人の警察官が駆けつけてきた  
鬼を見て啞然としている

Aはその間に、光を出そうとなにかネタをさがした  
M田のパンチラを思い出そうとした しかし光は出ない  
興奮が足りないのだ

警察官は腰に着けた拳銃に手をかけた  
鬼は素早く警察官に距離を詰め寄り、長く尖った爪で警察官の腕を切り落とした



警察官は痛みで動揺しながらも 正義感からか鬼にタックルをした

AはM田の顔や胸を思い出そうとした、しかし焦りからかはっきりと思い出せず、光は出ない

『ギャー』 警察官の悲鳴が聞こえる

しかしそれどころではない  
はやく勃たせないと、もとい光を拡大させないと命があぶない  
しかしネタがない

鬼の方を見る 警官はすでに絶命している

次は自分の番だ

Aはそう思った

その時、近くの茂みに本が落ちているのが見えた

近寄るとそれは

雨風に打たれヨレヨレになった エロ本だった

Aはエロ本を手に取りページをめくる

Aの股間から光が出始めた

ページをめくる

光は拡大する

鬼が雄叫びをあげた

Aは久しぶりにエロ本を見た

インターネットで動画が無料で見られる時代だ

ページをめくる

好きなページで手をとめる

それがいいのだ インターネットにはないアナログ感だ  
光はさらに拡大した半径1メートルくらいの大きさになった

だがこの鬼にはまだ効かないと思った  
前の鬼よりデカイからだ

Aはページをめくる手を止めた  
そこには、袋とじがついていた  
ハサミは無い 綺麗には袋とじを開けられない  
くやしいが手で破いていった

袋とじ  
中学生の頃コンビニで情報誌の袋とじを切らずに上から覗いてみたり、下から覗いてみたのを思い出す

懐かしい思い出も光を大きくさせた  
袋とじの最後のページが来ると 光は振動を始めた

『ヴォーーーーー』  
鬼は雄叫びをあげながら駆け寄ってきた

Aも雄叫びをあげた  
『イグーーーーー』

Aと鬼の雄叫びは入り交じった

そしてAの光は鬼の胸を貫き鬼を消し去った

Aは薄れゆく意識の中、公園を後にした

家につき、Aは鬼を倒したことでM田へ償いに少しはなったのではないかと思いながら、眠りに落ちた

## 最後の目覚め

---

次の日の朝Aが目覚めた時、Aの身体は光に包まれていた

Aが朝勃ちしているからだ

頭がひどく痛い

Aは部屋を見渡した

壁一面にM田のポスターが貼ってある

しかしAはそれが誰だか思い出せない

それよりもAはお腹が減っていた

お腹いっぱい肉が食べたかった

頭はさらに痛くなる

意識がなくなりそうだ

Aは外へ行く準備のため洗面所に行く

鏡に映ったAの頭にはツノが生えていた

## もうガマンできない

<http://p.booklog.jp/book/69584>

著者：モモンガ 桃の助

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/momongaman/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/69584>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/69584>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ